

中国抗戦時期文学と“民族” (三)

——“国民党系”作家の再評価をめぐる——

阪 口 直 樹

九、王平陵著作編著目録 (初稿)

【凡例】

★本稿は、王平陵の著作及び編著を発行（出版）年月日順に並べた目録である。但し、月・日が不明のものは、それぞれの項の最後に、また年月日が全く不詳のものは、目録の末尾に補遺として一括してまとめてある。

★著作欄に『 』があるものは単行本として出版されたもの、ないものは報刊或いは単行本所収のもの。

★台湾の秦賢次氏を煩わし“第一次増訂”をしていただいたが、未確認のものがまだ多数残っている。(初稿)として提出する所以である。

作品・单行本名	發表(出版)年月日	筆名	掲載誌紙(出版社)
<p>讀了《論散文詩》以後</p> <p>『美学綱要』(德耶路薩冷原著、王平陵訳)</p> <p>『中国婦女恋愛観』</p> <p>老母与新郎(到田漢)</p> <p>三民主義文芸的建設</p> <p>『社会学大綱』</p> <p>中華民族文芸運動宣言(共同)</p> <p>会见謝寿康先生的一点鐘</p> <p>搗鬼</p> <p>跑龍套的</p> <p>他們的戲劇</p> <p>副産品</p> <p>缺感</p> <p>添煤</p> <p>葉楚儉先生的芸術論</p>	<p>一九三二・一・一一</p> <p>一九三二・一一</p> <p>一九二七・</p> <p>一九二九・十・二九</p> <p>一九二九・</p> <p>一九二〇年代初</p> <p>一九三〇・六・一</p> <p>一九三〇・八・一五</p> <p>一九三〇・九・一五</p> <p>一九三〇・九・一五</p> <p>一九三〇・九・一五</p> <p>一九三〇・九・一五</p> <p>一九三〇・九・一五</p> <p>一九三〇・九・一五</p> <p>一九三〇・九・一五</p> <p>一九三一・一</p>	<p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>秋濤</p> <p>秋濤</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p> <p>平陵</p>	<p>文学周報25</p> <p>上海泰東圖書局初版</p> <p>上海光華書局</p> <p>南国周刊9</p> <p>中央日報</p> <p>上海泰東圖書局</p> <p>文芸月刊1-1</p> <p>文芸月刊1-2</p> <p>文芸月刊1-2</p> <p>文芸月刊1-2</p> <p>文芸月刊1-2</p> <p>文芸月刊1-2</p> <p>文芸月刊1-2</p> <p>文芸月刊1-2</p> <p>文芸月刊1-2</p> <p>文芸週刊(『中央日報』附刊)</p>

造成折節讀書的風氣	一九三二・四・一〇	讀書月刊 2 1
秋意 (隨筆)	一九三二・一〇・二〇	現代文学評論 2 3、3 1 合刊
前哨的急奏 (詩)	一九三二・四・二〇	矛盾 發動号
『獅子吼』 (詩集)	一九三二・一〇	上海南京書店初版
中国文芸思潮之没落与復興	一九三二・一二・五	矛盾 1 3・4
“手民之誤”	一九三二・一二・五	矛盾 1 3・4
覺紀与官箴	一九三二・一二・五	矛盾 1 3・4
讀論語	一九三二・一二・五	矛盾 1 3・4
『博浪沙』 (長篇小説)	一九三二・	矛盾叢書
『前哨的急奏』 (詩集)	一九三二・	矛盾叢書
“自由人”的討論	一九三三・一・一	矛盾叢書
南京“文芸茶話”的追記	一九三三・一・三一	文芸月刊 3 7
落寬 (Lamartine 著・訳)	一九三三・二・一	文芸茶話 1 6
“最通的”文芸	一九三三・二・二〇	文芸月刊 3 8
救国会議	一九三三・三・一	武漢日報 (「文芸週刊」)
南国社之昨日与今日	一九三三・三・五	文芸月刊 3 9
		矛盾 1 5・6

苦像 Le Crucifix (Lamartine 著・訳)	一九三三・五・一		文芸月刊 3 11
静静的玄武湖	一九三三・六・一		文芸月刊 3 12
地上的界限	一九三三・六・一	秋濤	文芸月刊 3 12
父与子	一九三三・七・一	秋濤	文芸月刊 4 1
期待	一九三三・一〇・一	秋濤	文芸月刊 4 4
期待	一九三三・一一・一	秋濤	文芸月刊 4 5
期待	一九三三・一二・一	秋濤	文芸月刊 4 6
烟	一九三四・一・一		文芸月刊 5 1
文昌星	一九三四・二・一		文芸月刊 5 2
十月之夜	一九三四・二・一		矛盾 2 6
重婚 (電影本事)	一九三四・五・一		文芸月刊 5 5
『文芸家的新生活』	一九三四・五		南京正中書局
『期待』(中・短篇小說集)	一九三四・七		南京正中書局 《中国文芸社叢書》
『所謂自伝也者』	一九三四・一〇	秋濤	讀書顧問 1 3
看貨色	一九三四・一〇	平陵	讀書顧問 1 3
讀了「一十宣言」以後	一九三四・一〇	平陵	讀書顧問 1 3

梅蘭芳的觀衆	一九三四・一〇	高山	讀書顧問 1 3
胡適將胡適？	一九三四・一〇	平陵	讀書顧問 1 3
示威	一九三五・二・一		文芸月刊 7 2
杭游散記	一九三五・三・一		文芸月刊 7 3
俘虜	一九三五・四・一		文芸月刊 7 4
房客太太	一九三五・五・一		文芸月刊 7 5
過文德裏故居	一九三五・六・一		文芸月刊 7 6
中国新文学的誕生	一九三六・一・一		文芸月刊 8 1
孤城落日 (電影劇本) 合編	一九三六・二・一		文芸月刊 8 2
缺憾及其他	一九三六・七・一		文芸月刊 9 1
楊柳岸 (詩四首)	一九三六・八・一		文芸月刊 9 2
中国現段階的文芸運動	一九三六・九・一	史痕	文芸月刊 9 3
誇張及其他	一九三六・一二・一		文芸月刊 9 6
清算中国的文壇	一九三七・一・一		文芸月刊 10 1
慈母的墳塋 (Lamartine 著・訳)	一九三七・二・一		文芸月刊 10 2
生意經 (電影劇本)	一九三七・三・一		文芸月刊 10 3

中國藝人的使命	一九三七・三・一	史痕	文芸月刊 10 3
友情	一九三七・三・一	秋濤	文芸月刊 10 3
戲劇批評者的責任	一九三七・五・一	秋濤	文芸月刊 10 4・5
介紹梁詒莎翁名劇	一九三七・五・一	秋濤	文芸月刊 10 4・5
評《春風秋雨》	一九三七・五・一	草萊	文芸月刊 10 4・5
一九三七年中國戲劇運動之展望(座談會)	一九三七・五・一六	戲劇時代	1 1
生意經(統)	一九三七・六・一	文芸月刊	10 6
生意經(統完)	一九三七・七・一	文芸月刊	11 1
焦土抗戰與堅壁清野	一九三七・一〇・二二	文芸月刊	戰時特刊創刊
怎樣發動抗戰戲劇?	一九三七・一〇・二二	文芸月刊	戰時特刊創刊
深入田間宣傳的藝術	一九三七・一一・一一	文芸月刊	2
漢奸來源的分析	一九三七・一一・一一	文芸月刊	3
不堪回首月明中	一九三七・一一・一一	西冷	文芸月刊 3
詠閩北八百壯士	一九三七・一一・一一	秋濤	文芸月刊 3
後方的志士	一九三七・一一・一一	草萊	文芸月刊 3
難民何處去	一九三七・一一・二二	文芸月刊	1 4

覓尸 戰時中国文芸運動 戰時的報告文学 戰時的移動演劇 戰時的高等教育 雨夜搶江舟(回憶錄) 戰時作品的題材与技巧 配合遊擊隊的宣伝技術 最後的敬礼(小説) 奪回我們的“耶魯撒冷” 戰時的下層政治機構 戰時的区鄉保長 春天帶來的希望 歌中国飛將軍 『戰時文学論』 中国文芸工作者的責任	一九三七・一一・二一 一九三八・一・一 一九三八・一・一 一九三八・一・一六 一九三八・一・二一 一九三八・一・二一 一九三八・一・二一 一九三八・二・二一 一九三八・三・一五 一九三八・三・一六 一九三八・三・一六 一九三八・三・一六 一九三八・三・一六 一九三八・三・一六 一九三八・三・一六 一九三八・三・一六 一九三八・四・一	西冷 草萊 西冷 西冷 疾風 平陵 疾風 草萊 西冷 秋濤	文芸月刊 1—4 文芸月刊 1—5 文芸月刊 1—5 抗戰戲劇 1—5 文芸月刊 1—6 文芸月刊 1—6 文芸月刊 1—6 創導 2—5 文芸月刊 1—7 彈花 1—1 文芸月刊 1—8 文芸月刊 1—8 文芸月刊 1—8 文芸月刊 1—8 文芸月刊 1—8 漢口上海雜誌公司 文芸月刊 1—9
---	---	--	--

中華全国文芸界抗的協會籌備經過	一九三八・四・一	草萊	文芸月刊 1 9
中華全国文芸界抗敵協會發起旨趣	一九三八・四・一		文芸月刊 1 9
『武漢各界第2期抗戰擴大宣傳周特刊』中に	一九三八・四・七		新華月報
王平陵の文章あり			
為抗戰而写作 (理論)	一九三八・四・一〇		彈花 1 2
編制士兵讀物的我見	一九三八・四・一六		文芸月刊 1 10
台兒庄	一九三八・四・一六		文芸月刊 1 10
黃鶴樓上 (散文)	一九三八・五・一〇		彈花 1 3
在抗戰中建立文芸的基礎	一九三八・五・一〇		抗戰文芸 1 3
給周作人的一封信 (共同)	一九三八・五・一四		抗戰文芸 1 1
論戰時的通俗文学	一九三八・五・一五		文芸 5 4
我們写些什麼	一九三八・五・一六		文芸月刊 1 11
怎樣編制士兵通俗讀物 (座談会)	一九三八・五・二一		抗戰文芸 1 5
覺醒吧！ 出賣祖國的奴役！	一九三八・五・二八		抗戰文芸 1 6
光榮的劇人 (論壇)	一九三八・五・二九		戲劇新聞 3
文学的提高与普及	一九三八・六・一		文芸月刊 1 12

<p>『電影文学論』 朝鮮人 論戰時的通俗文学 乱中一片的落葉 重慶——美麗的山城 中国文艺界的幸運 後防的文艺運動 憶遼寧 迷途的靈魂 怎樣写抗戰劇本 全国音樂家動員起来 『東方的坦倫堡』 中国到自由之路 展開淪陷区域的文艺宣傳 建立淪陷区域的文艺工作(座談会) 再論展開淪陷区域的文艺宣傳</p>	<p>一九三八・五 一九三八・六・一 一九三八・六 一九三八・七・一 一九三八・七・二三 一九三八・八・一六 一九三八・九・一 一九三八・九・一六 一九三八・九・一六 一九三八・一〇・一六 一九三八・一〇・一六 一九三八・一〇・一六 一九三八・一一・一 一九三八・一一・一六 一九三八・一一・二六 一九三八・一二・一</p>	<p>史痕 西冷 草萊</p>	<p>長沙商務印書館 文艺月刊 1 12 文艺復刊 1 文艺 5 5 抗戰文艺 2 2 文艺月刊 2 1 文艺月刊 2 2 文艺月刊 2 3 文艺月刊 2 3 文艺月刊 2 3 文艺月刊 2 5 文艺月刊 2 5 文艺月刊 2 5 重慶 文艺研究会 文艺月刊 2 6 文艺月刊 2 7 抗戰文艺 2 11・12 文艺月刊 2 8</p>
--	--	-------------------------	--

荒村之火	一九三九·一·一		文芸月刊 2 9 · 10
第一次徵求抗戰軍歌的經歷和感想	一九三九·二·一		文芸月刊 2 11 · 12
“日本軍閥太凶暴”	一九三九·二·一		文芸月刊 2 11 · 12
“列、拉”	一九三九·二·一	史痕	文芸月刊 2 11 · 12
“砲声隆、殺声緊”	一九三九·二·一	西冷	文芸月刊 2 11 · 12
王平陵先生來信	一九三九·二·一		文芸陣地 2 9
詩（撒旦的世界）	一九三九·二·一八		抗戰文芸 3 9 · 10
戰時作品的現實性	一九三九·三·一六		文芸月刊 3 1 · 2
望江南	一九三九·三·一六	西冷	文芸月刊 3 1 · 2
新兵隊的藝術生活	一九三九·四·一六		文芸月刊 3 3 · 4
敵機瀾炸重慶的教訓	一九三九·五·二〇		文芸月刊号外 1
女優之死（長篇連載）	一九三九·六·一六		文芸月刊 3 5 · 6
文芸的“孤城戰”	一九三九·六·一六	草萊	文芸月刊 3 5 · 6
女優之死	一九三九·七·一六		文芸月刊 3 7
作家的訪問	一九三九·七·一六	史痕	文芸月刊 3 7
女優之死	一九三九·八·一六		文芸月刊 3 8 · 9

後方文芸	一九三九・八・一六	西冷	文芸月刊 3 8・9
女優之死	一九三九・九・一六		文芸月刊 3 10・11
女優之死	一九三九・一二・一		文芸月刊 3 12
拙劣的驢技	一九四〇・一・九		新蜀報「蜀道」 9
大時代的兒女們	一九四〇・一・一六		文芸月刊 4 1
保障作家生活的意義	一九四〇・二・三		新蜀報「蜀道」 34
第一次徵求軍歌的經過	一九四〇・二・一五		新蜀報「蜀道」 45
從松井出家說起	一九四〇・二・二六		新蜀報「蜀道」 56
古董与“今”董	一九四〇・三・二		新蜀報「蜀道」 61
“摧生”与“摧生”	一九四〇・三・一六	草萊	文芸月刊 4 2
偉大的？ 渺小的？	一九四〇・四・一六	史痕	文芸月刊 4 3・4
中国劇運的新階段	一九四〇・六・一〇		新演劇 復刊号
登場	一九四〇・八・一六		文芸月刊 4 5・6
枉法与恂情	一九四〇・九・一三		新蜀報「蜀道」 228
提供一個文芸的課題	一九四〇・九・一四		新蜀報「蜀道」 229
從自己作起	一九四〇・一一・二五		新蜀報「蜀道」 291

談師資	一九四〇・一二・一五	新蜀報「蜀道」	309
一九四一年文學趨向的展望（座談會）	一九四一・一・一	抗戰文芸7—1	
我的感想	一九四一・二・一	新蜀報「蜀道」	349
最可靠的投資	一九四一・二・二一	新蜀報「蜀道」	365
『夜奔』（小說集）	一九四一・三	長沙商務印書館（又一九四三・六 重慶版《大時代叢書》）	
期待的南斯拉夫	一九四一・四・二	新蜀報「蜀道」	396
寓團結於生產	一九四一・四・二二	新蜀報「蜀道」	412
文芸與生產建國運動	一九四一・五・一六	文芸月刊11—5	
粉碎軸心小夥伴	一九四一・七・二二	新蜀報「蜀道」	441
《月下追韓信》	一九四一・八・五	新蜀報「蜀道」	462
抗戰四年來的小說	一九四一・八・一六	文芸月刊11—8	
提高演劇的水準	一九四一・一〇・一〇	文芸月刊11—10	
祝湘北再度大捷	一九四一・一〇・一七	新蜀報「蜀道」	511
維他命	一九四一・一一	文芸月刊11—11	
歡迎狂風暴雨的大時代——為文協元旦特刊作	一九四二・一・一	新蜀報「蜀道」	555

<p>『送礼』</p> <p>『偉大的民族戰爭』(論著)</p> <p>救治革命文学的貧血症</p> <p>全国文艺界總動員</p> <p>徹底摧毀希魔的凶暴主義</p> <p>展望烽火中的文学園地</p> <p>進城</p> <p>“滾鉄板”主義</p> <p>晚風夕陽裏</p> <p>文艺簡訊 王平陵近作『女優之死』現已出版</p> <p>『新狂飆時代』</p> <p>評“我們所需要的文艺政策”</p> <p>『情盲』(小説集)</p> <p>『大時代文艺叢書』(主編)</p> <p>新時代的兒童文学</p> <p>国宝</p>	<p>一九四二・七</p> <p>一九四二・七</p> <p>一九四二・一〇・一〇</p> <p>一九四二・七・七</p> <p>一九四二・一〇・一〇</p> <p>一九四二・一〇</p> <p>一九四二・一一・一〇</p> <p>一九四三・四・一五</p> <p>一九四三・七・二〇</p> <p>一九四三・八・二二</p> <p>一九四三・八</p> <p>一九四三・</p> <p>一九四三・</p> <p>一九四三・</p> <p>一九四四・五・二〇</p> <p>一九四六・一</p>	<p>史痕</p>	<p>重慶商務印書館《大時代叢書》</p> <p>重慶勝利出版社《真理叢書》</p> <p>文艺先鋒 1 1</p> <p>新蜀報「蜀道」 750</p> <p>新蜀報「蜀道」 811</p> <p>抗戰五年</p> <p>文艺先鋒 1 3</p> <p>天下文章 2</p> <p>文艺先鋒 3 1</p> <p>新蜀報「蜀道」 989</p> <p>重慶商務印書館</p> <p>文艺論戰(文運會印)</p> <p>重慶商務印書館</p> <p>香港商務印書館</p> <p>文艺先鋒 4 5</p> <p>文艺先鋒 8 1</p>
---	---	-----------	--

開會	一九四六・二・二八	文芸先鋒 8 2
『副產品』(詩・散文集)	一九四六・	商務印書館
『嬌喘』(長篇小說)	一九四六・	上海百新書店
七年来的抗戰文学	一九四六・五・	中国戰時學術
痛哭流涕長嘆息	一九四七・一一・一六	論語 141
談幽默感	一九四七・一一・三〇	文芸先鋒 11 3・4
披糞篇	一九四七・一二・一六	論語 143
『湖浜秋色』(短篇集)	一九四七・	商務印書館
山窮水尽疑無路	一九四八・一・一	論語 144
人之大德曰睡	一九四八・六・一六	論語 155
談包工制度	一九四八・八・一	論語 158
揩油篇	一九四八・一一・一	論語 164
微妙的契機	一九四九・四・一	論語 174
『残酷的愛』(長篇小說)	一九五一・二	正中書局(台北)
『茫茫夜』(長篇小說)	一九五三・	華国出版社(台北)
『帰来』(長篇小說)	一九五五・	中華書局(台北)

『火種』(短篇小説集)	一九五五・	中央文物供應社(台北)
『雕虫集』(散文集)	一九五五・	自由出版社(香港)
『三十年文壇滄桑録』(上集)	一九五六・六	中国文艺社
『夜』(戲劇)	一九五七・	改造出版社(台北)
『游奔自由』(短篇小説集)	一九五八・	(一九六二正中書局)
『幸福的泉源』	一九五八・	中央文物供應社
『台北夜話』(劇本)	一九五九・二	改造出版社(台北)
『愛的感召』(劇本)	一九五九・二	(一九六〇正中書局)
『自由魂』(戲劇)	一九五九・	亞州出版社(香港)
『錦上添花』(劇本)	一九五九・	亞州出版社(香港)
『王平陵先生論文集』	一九七五・	亞州出版社(香港)
		正中書局

補遺一…発表年月日不詳の作品リスト

- ① 快節奏的情緒（『中国新文学創作叢刊』四集「中国的勝利」智燕出版社 一九七九・一 所収）
 - ② 太平洋暴風雨（『抗戰文選』五集「八方風雨」長橋出版社 一九七九・八・一〇 所収）
 - ③ 雨重慶之夜（『抗戰文選』六集「黯黯行雲」長橋出版社 一九七九・八・一〇 所収）
 - ④ 幾個旧課題的新発見（『抗戰文選』六集「黯黯行雲」長橋出版社 一九七九・八・一〇 所収）
 - ⑤ 三代以下（『抗戰文選』七集「山城曙色」長橋出版社 一九七九・八・一〇 所収）
 - ⑥ 東方的担倫堡（『抗戰文選（黎明版）』三集「古城的呻吟」黎明文化事業公司 一九八七・五 所収）
 - ⑦ 火、血、祭（『抗戰文選（黎明版）』四集「嘉陵江的依戀」黎明文化事業公司 一九八七・五 所収）
 - ⑧ 在抗敵戰線下的文芸家（『民意』所収 一九三七年十二月五日漢口で創刊）
 - ⑨ 從日本文学作品來觀察（同右）
 - ⑩ 戰時小説的創制（同右）
 - ⑪ 我的母親（小説）（同右）
 - ⑫ 血祭天長節（同右）
 - ⑬ 重慶的一角（『中国現代文学補遺書系』（小説卷五）明天出版社 一九九〇・九所収）
- 補遺二…出版社・出版年月日不詳の単行本リスト
- ① 『帰舟返旧』② 『西洋哲学概論』③ 『走目蘇花路』（散文集）④ 『我在馬尼拉的生活』（散文集）⑤ 『国宝』⑥ 『沙龍夫人』⑦ 『魔姫』⑧ 『少女心』⑨ 『乘風破浪』⑩ 『欲魔』⑪ 『新英雄伝』⑫ 『漩渦』⑬ 『新亭淚』⑭ 『維他命』

- ⑮『狐群狗党』⑯『香島春夢』⑰『苦闘』⑱『鈎心鬪角』⑲『太平洋大風暴』⑳『大団結』㉑『藍色的大路』㉒『開会』㉓『創作芸術論』

十、黄震遐・大晩報についての若干の補充

第六章で、黄震遐『大上海的毀滅』を取り上げた際、その原載誌『大晩報』の性格に関して次のように述べた。

「作品が連載された『大晩報』がどんな性格であるかはわからない。当時の四大新聞には入っていないから、恐らく『大衆新聞』或いは『小報』の一つであろう。」⁽¹⁾

ところがその後、丸尾常喜氏から、魯迅はこの『大晩報』紙のことについて、たびたび作品の中で取り上げており、『魯迅全集』の注にもそのことが触れられている、という連絡を頂いた。

《大晩報》、他の資料は知りませんが、魯迅全集では《偽自由書》以後しょっちゅうでてくる新聞で注もあります。一九三三年二月一二日上海で創刊。創刊号は張竹平。のちに孔祥熙が買収。一九四九年五月二五日停刊。副刊に《辣椒与橄欖》と《火炬》。後者は文芸副刊で崔万秋が主編。魯迅はたしかに「無聊的小報」とはいつていますが、あまり「小報」ともいえないかもしれません。現物はむろん見たことはないが、魯迅が両副刊から相当数の文

章を抜いて、自分の文章のうしろにくっつけています⁽²⁾。

なるほど、『魯迅全集』には『大晩報』に関する注が「しよっちゅう」でてくる。同注によると、該紙は一九三二年二月一二日上海で創刊という風になっていて、当時創刊後まもなくした新聞のようである。一方、太田進氏から提供された資料では、『大晩報』という新聞は、これ以前にもあったらしい。例えば以下のようなものである。

①「The Evening News (大晩報) 日刊英字新聞」発行所北京路四三二七号 大晩報社

(《上海一覽》一九二八年(昭三)一一・二〇 上海至誠堂新聞舖發行より)

②「大晩報(漢字新聞)」 英国籍 二万部以上 愛多亞路六〇号

(《上海要覽》改訂増補 上海日本商工会議所發行 昭一四(一九三九)・八・一二より)

③「大晩報(Evening News, 1922)」

(《上海全書》学林出版社 一九八九・一一より)

これで見ると、一九二二年創刊で、当初は英国籍の日刊英字新聞であったらしい。その後三〇年代ごろには漢字の新聞になっているが、やはり英国籍というから、この三者は同一のものと考えていいだろう。出版部数は二万部以上と記載されているが、一説によれば三万五千以上というものもある。当時は、かなり売れていた新聞ではないだろうか。ただ、『魯迅全集』の注にある、『大晩報』とは創刊日時が違っているので、判断は難しい。英国籍の『大晩報』が一九三二年になって、張竹平により買収され、新たに創刊と銘うたれた³可能性もなくはない。

さて、話は戻るが、『魯迅全集』をみると、「且介亭雜文」、「書信」、「南腔北調集」、「淮風月談」、「偽自由書」

など至る所に、『大晩報』が取り上げられ、それに対する注が施されている。三十年代にいくつかの“小報”が、魯迅の“人身攻撃”をしているが、その最右翼が『大晩報』と『社会新聞』であったことがわかる。この関係を魯迅自身の文章「偽自由書」後記では、次のように述べる。

一見してわかることだが、私が短評を発表したとき、もっともはげしく攻撃してきたのは『大晩報』だった。それというのも私と前世からの仇敵であったからではなく、私とその文章を引用したせいである。私のほうだって、向うと前世からの仇敵であるからということではなく、私が『申報』と『大晩報』の二種類しか読んでおらず、後者の文章はいつもとても奇妙に感じられ、引用して気晴らしにするだけのことはあると思ったからである。たとえば、いま、私の目の前には、煙草を包んできた三月三十日付の古い『大晩報』があるが、そのなかにもこんな一説がある——⁽³⁾

後記はこのあと、延々と『大晩報』と記事を引用しながら、その文章をあげつらって辛辣に批判している。魯迅が「『申報』と『大晩報』の二種しか目にしない」としているのは事実ではなからう。タバコを包んであった古新聞の記事をわざわざ取り上げて、攻撃するなどというのは、典型的な侮蔑の手法であるともみてよい。事実「偽自由書」は『大晩報』の記事との関わりが極めて多いのが特徴で、バーナード・ショーをめぐってのやりとりや、王平陵に反駁した「不通兩種」も『大晩報』の記事を引用してのものだったし、「止哭文学」は『大晩報』副刊「辣椒与橄欖」掲載の王慈論文への対応で書かれている。また、「文人無文」では「ある“大”の字のつく新聞の副刊」という言葉

で、『大晩報』を槍玉にあげたりしているのだ。

それはともかく、三十年代初期に魯迅が雑文の主要舞台としたのは、『申報』『自由談』であり、その時期魯迅に敵対したメディアが『大晩報』（また『社会新聞』）であった、という構図を見ることはたやすい。そして、一九三〇年以来魯迅が批判し続けていた『民族主義文学運動』の作品が、この『大晩報』上に連載されたことは、二重の意味で彼を刺激していたようだ。これを裏づけるように、黄震遐の『大上海的毀滅』について、魯迅は極めて執拗な攻撃をしかけているのである。

その一つ。「對於战争的祈祷——讀書心得」は、黄震遐の『大上海的毀滅』からの引用が大部分を占めている。全文を見てみよう。

熱河の戦争が始まった。

三月一日——上海戦争終結の「記念日」もまもなくやってくる。「民族英雄」の肖像は何回も何回も印刷され売り出されている。が、雑兵たちの血、傷あと、熱い真心は、さらにどれだけのあいだ人に踏みつけられねばならぬだろう。回憶の中の砲声と数千里の向うの砲声に、我々は為すすべもなく苦笑いを浮かべ、一冊の退屈な、しかし多くの「警句」に富んだ暇つぶし用の本を開く。その警句とは、

「ねえ小隊長、我々はいったいどこへ行くんですか」——そのうちの一人が尋ねた。

「歩け。おれも知らん」

「こん畜生、みんなおっ死んじまったらそれっきりじゃねえか、歩いてなんになるんだ」

「つべこべいうな、命令に従え」

「こん畜生の命令め」

しかし、こん畜生はこん畜生であるが、命令はやはり命令であり、歩くのもむろんやはり歩かねばならぬのである。四時ごろ、中山路に再び静寂が戻り、風と木の葉はサラサラと鳴り、月は灰色の雲海に隠れ、眠ったままで、相変わらず人間のことにとはとりあわない。

こうして、十九路軍は西に向かって退いていった。

(黄震遐『大上海の壊滅』)

いつになったら「こん畜生」と「命令」はこのように無関係でなくなるのか、そうすれば助かるのに。そうでなかったらどうなるか。やはりこの問題に答えてくれる警句がある。

十九路軍の戦いは、我々に語っている、たわごとをいうほかに、まだちゃんとやることがあると。

十九路軍の勝利は、我々のかりそめの、安逸と驕りの迷夢を増し得ただけだ。

十九路軍の死は、我々の生き方が憐れで、無意味であることを警告している。

十九路軍の失敗こそが、我々に努力しないなら、やはり奴隷になるほうがよいと語っている。

(同書)

これは我々に、革命にあらざれば、一切の戦争はかならず失敗する運命にある、と警告しているのである。いま、主戦論は人間なら誰でもいえる——これは一・二八の一九路軍の経験だ。戦うのはどうしたって戦わねばならぬ、しかし、間違っても勝ってはいけない、しかも戦死するのもうまくない、多すぎず少なすぎずかつかつ適当な方法

は負けることだ。「民族英雄」の戦争に対する祈りとはこのようなものだ。しかも戦争は確かに彼らが指揮しているものであり、この指揮権は決して他人に渡そうとはしないのである。戦争は、主催者が予定している負け戦の計画に耐えられるだろうか。まるで舞台の上の「花臉」と「白臉」の戦いのようなものだ。誰が負けて誰が勝つかはとくに舞台裏で予め決められている。ああ、われらが「民族英雄」よ！（五九頁）

引用の前半部分は、上海市街区から敗走する十九路軍兵士の会話の個所であり、これといれ違えに主人公草靈は単身で、敵との自滅的戦闘に乗り込んでいくのである。また引用の後半部分は壊滅した十九路軍の龍連長が主人公の草靈にあてた手紙を読んでの、感想部分である。この悲劇的状況のなかで取り得る選択肢を、草靈は四点（上掲引用部分の四条を指す）にしぼるのだが、悩みのすえにこう考える。

ベッドに横たわりながら、私はこの四つの答案をあれこれと考えていたが、終にまた、多くの矛盾と誤りがあるのに気がついた。とりわけ、自分が考えていたあれらの“われわれ”とは単に外人の庇護の下に隠れていた蘇秦張儀達のことであったのだと、ならばまたどうしてそのことをもちだす必要があるというのか？^⑤

見よ、東方は白みはじめた、一面の空は真っ赤に染まった、ここにはきつと改造の希望が大いにあるのだ、しかも、この希望に到達するためには、その場しのぎに忍耐しなければならぬ、という人もいる。だが私はもう待てない、……だから私は決めたのだ、この真っ赤な空が白い色に、そしてさらに再び暗闇に落ちこむときに、私はで

かけよう、龍連長のところに行き、わが微小なるこの身を、咆吼する獅子の口のなかに投じよう。⁽⁵⁾

作者と主人公は魯迅のいうように、敗北を望むものでも、勝利を非とするものでもない。まして、適当な“失敗”をこころがける“戦争への祈り”などというものでもない。草霊は、このあと敗北したあとの上海の閘北で、特攻隊に参加し死の道を選ぶのだから。そこから見ると、魯迅が引用したこの部分は適当だといえないし、こじつけ的要素が感じられる。ただ、魯迅が、黄震遐の思想にある悲観的なヒロイズム（＝甘さ）を毛嫌いしているとはこの文からは充分に感じとることができる。

魯迅の執拗な攻撃は、『申報』『自由談』を舞台にまだ続く。上文が掲載されて一カ月後、何家幹名で魯迅は「止哭文学⁽⁶⁾」を書いているが、そこでも黄震遐の上掲作品を取り上げている。

ここで魯迅は東北三省に対する日本軍の侵略の激化という状況をとりあげ、民族文学の作家黄震遐の「黄人之血」と、とりわけ『大上海的毀滅』を引き合いにだしながら、論を展開していく。

そこで『大上海の壊滅』が登場し、数字をあげて中国の武力はたしかに日本には及ばないと読者に語り、人々の心を平静にさせた。そればかりか、生きているより死んだ方がましだ（「一九路軍の勝利は、我々のかりそめの、安逸と驕りの迷夢を増し得ただけだ」と考えている。要するに、戦死は結構だ、ただし戦敗はとりわけ結構なのだから、上海の戦争は、まさに中国の完全な成功だ、というのである。」（八九頁）

引用する箇所は、前の文章と同じ箇所である。ただ、最後部分で中国の将来を黄震遐の二作品に重ねて、次のようにまとめている。

『連合しなければ』ならなくなったのだ。今度は中日両国の完全な成功であり、『大上海の壊滅』から『黄人の血』へと進む第二段階である。」（九〇頁）

黄震遐が「黄人之血」で書いたのは、ジンギスカンのバツ―元帥が当時のロシアに進出することだが、魯迅はそれをひっかけて、『大上海的毀滅』で自滅した中国は、今度は日本と聯合して、ロシア（ソ連）侵略を図ろうとしている、と非難しているわけである。

黄震遐がロシア侵略を主張したというのは、どうも理解しにくいのだが、『真美善』に掲載された詩などをみると、独特の彼の詩風がうかがえる。それをまとめてみると

- ① 共通して描かれるのは「戦争」であり、従軍の経験をもとにした戦争詩人としての評価と一致する。
- ② その戦争とは、無国籍（コスモポリタン）であり、ある場合には清国の皇帝を描き、ある場合にはシベリア、幹羅斯（ロシア）を描き、又ある時はアラビアやアフリカであったりする。
- ③ その作風は、自虐的、幻想的な非リアリズムを特徴とする。
- ④ 形式面では、押韻も配慮するなど、リズムカルな定型詩に近いものである。また用語も時間・空間的な広さを

もったものが意識的に選択されている。

といったことであろう。⁽⁸⁾

黄震遐の詩が、「西方文芸思潮の影響の下に、唯美主義や頹廢主義的色彩が表現された」『真美善』の雑誌に掲載されたことも故なしとしない。彼が後に民族主義文学の代表と位置付けられているのは、彼の作風とは全くそぐわないくらいである。

魯迅が『大晩報』を極端に毛嫌いしていたために、同紙に連載された黄震遐の『大上海的毀滅』をくりかえしとりあげ、批判したというのはその通りだとしても、黄震遐個人の作風や思想に対する疑惑と不信が、それを更に増幅させる要因となっていたことも考慮する必要があるだろう。

《註》

- (1) 拙論「中国抗戦時期文学と“民族”——その二」四三頁。
- (2) 一九九一年三月一日付け「丸尾常喜氏よりの手紙」。
- (3) 一九三三年七月二〇日付け（『魯迅全集』第七卷二八一頁）。
- (4) 《偽自由書》所収、魯迅の文章の訳文は『魯迅全集』（学習研究社刊昭和六一年五月六日）による。以下同じ。
- (5) 『大上海的毀滅』大晩報館刊一九三二年一月初版三二七、三二八頁（上海書店八九年十二月影印）
- (6) 『魯迅全集』《偽自由書》所収（一九三三・三・二四発表）
- (7) 『真美善』一九二七年十一月一日上海で創刊。一九三二年七月停刊。編者は「真美善雑誌編輯所」だが、実際は曾孟樸、

曾虚白父子があたっていた。芸術面では、唯美主義の作品もあったが、主流は「晚清譴責小説の特色を継続・保持していた」（『中国現代文学期刊目録彙編』天津人民出版社刊「簡介」による）。

(8) 『真美善』四―二掲載（一九二九・六・一九）の「韃靼人的墳」、「死駱駝的長呼」及び六―五掲載（一九二九・九・一六）の「青白戦士の全身」、「香妃」、「怪夢」である。なお、後者は『失踪詩人黄震遐残稿』を特集しているが、その前書きに以下の部分がある。

「一昨日、『申報』の「芸術界」で、葉秋原君がわが詩人黄震遐君の失踪と戦死の可能性を紹介した記事を目にした。これは我々をひどく驚かせた。おもえば、多分昨年末のことであつたらうか、黄先生は我々のところへ別れの挨拶をして来たことがある。その時の話では、家のほうでやらねばならぬことがあるので、広東に戻るといったことだったが、すでに彼は決心をして軍隊に入り従軍にいったのだとは予想もしなかったことだ。我々は葉秋原君の推測が不正確で、ひょっとしてまもなく黄君がまた、次のような優れた詩を我々に見せてくれるであろうことを希望している。」